

馬場孤蝶

変りゆく東京



変りゆく東京

一

誰でも、春よりは秋の方が心持がいいと思うであろうが、私共は近来、殊に、秋の方が心持がいいように思われ出した。

誰に聞いて見ても、東京の春が近頃は寒くなつた様という。此の頃では私共は春、あわせ 袷あわせを着る間がひどく短くなつた様に、思うのであるが、それは残念ながら、年のせいかとも思うけれども、どうもそれ許ばかりではない様に

も思われる。私共は、五月位までは、どうしても綿入で居る。で、袷とシャツと袷羽織になったかと思うと、殆ど一っ飛びに単衣ひとえになってしまふ様な気がする。あまり品のいいものではないが、素袷すあわせで居るとするのは、一寸心持のいいものだ。近頃では、私共は、決して素袷では居られない。町を歩いてみても、一般に、素袷で居る人を余り見かけない様な気がする。

一つは風俗の変化でもあるのだらう。即ち誰でも服装をちゃんと整えるという風になつていたので、素袷で飛び出すという様な人が余り無くなつたのであろうが、然

し一方では、氣候の工合が近来違つて来たのが一つの原因であろうと思われる。

そうして見ると、私共の様な冬の嫌いな寒がりになると、春がそれほど有難く^{ありがた}ない訳になる。却つて、夏の暑さから逃れて秋に入つて行く方が心持がいい。

自然の景色などは、秋になると、グツと落著いて、如何にも冴えた静かな心持を人に印象する事は今更いうまでもないが、今頃になると、東京近所の川筋の景色が何時も思い出される。其処の景色を特徴づけるものはあの白いすすきである。川の堤^{どて}や、洲^すに茂っているすすきの

白い穂と、枯れた茎や葉の取合せがひどくいい心持に思われる。場所をあげれば、千住の大橋の上あたり、六郷かみの川下などの景色がそれである。陽のよく照る日に、川の堤に立って見て居ると、そのすすきの間から、和船の帆が静かにゆるゆると出て来るのなどは、如何にも我々のハートに、深く根ざして居る心持よい景色であると思う。

二

東京では此の頃は一帯に空地がすくなくなくなっている。二

十年も前までは、牛込、小石川などでも、商業中心にな
っている部分を少し離れると、一寸した家には、七八坪
の庭は附いていたものであるが、今は余程場末ばすえにでも寄
らなければ、庭と言うべき様な空地のついている家は余
りない様である。

しかし、東京の空地が少くなり、木立なども段々無く
なつて行つた訳であるが、何しろ、幾つもの村落、幾つ
もの小さい町が、互に発展し合つて連りあつた東京の事
であるから、全般的に言えば、未だ中々空地はある。

私の知人で知名のある文学者は、二三代からの所謂江

戸っ子であるのだが、その人が嘗つて京都の高等学校へ勤める事になって一年ほど行つて居た。

で、ある年の暮に東京へ歸つて来て、正月になつて私と一緒に電車に乗つて、牛込の田町辺りから、お茶の水まで行つた。その間あいだもしきりに窓から外の景色を眺めて居たが、お茶の水で降りて、橋を渡りかけると、その友人は、微笑を含んだ低い声で、

「東京の景色は雄大だねえ。」と言つた。で、私も笑い出して、

「西洋まで行つた君が東京の景色を雄大だなんていうよ

うじや、よくよく京都には閉口した様だね。」と答えた事がある。

確に東京の景色は雄大だ。私は今市ヶ谷の本村町ほんむらちように居るが、市ヶ谷の外濠の景色は私にとっては何時も心持がいい。市ヶ谷見附、新見附などから見ると、今頃は高台や濠内の樹の色などが、黄色に色づいていて、如何にも秋らしい落著おちついた眺めである。

勿論、人工的の景色には相違ないが、始めは人の手で樹を植え、堤を築き、濠を掘ったのであっても、それを自然の懐に任せて少し長く放っておけば、自然はこれを

取り上げて何等かの景色にして呉れるのだ。

東京の町へ殆ど禁錮きんこされている様な我々にとって、
そういうような自然の景色の中でも、自由にさ迷うこと
が何十分か出来る場合には非常な慰藉いしやになると思う。

私は一体ブラブラ歩くことが好きなのだから、時々用
達たしの帰りに、神田から九段を上りのぼ、市ヶ谷見附へ出て帰
る事がある。その節もある若い人と一緒に、市ヶ谷見附
へ出て来て、濠端の樹の景色などを心持よく眺め、それ
から、家の近くまで来ると、ふと、家の廻りまわりを大変心持
のいい処だと思った。

尤も、その日は前から雨が降って居たが、その朝から雨が上って、段々天気は持ちなおして来て、やや稍々晴れかかっている午後の二時過ぎ、という頃であつたので、急にそんな感じがしたのであるかと思う。

三

東京の町は、何処でも大抵市区改正で広くなつて居るので、昔の町の形が残つて居る処は、まことに尠いのであるが、それでもまだ秋には時々昔ながらの町へふと足

を踏み込む事がある。

処で、そういう町は非常に狭い様に思う。そういう町を目ざして行く場合は、余程気をつけて居ないと、ついその曲り角を通り越して了う事もある位である。

そういう町の代表的なものを、今一つ挙げて見ると、本郷の松屋の横から台町へ出る横町であるが、あの横町は、突き当って、左へ少し曲って、それから台町の方へ真直に行く様になって居る。あの横町などは或は明治になつて出来た横町かも知れないが、私共にとっては何う四十年ほどの馴染の横町である。然し住んでいる人の

様子は、ずっと昔より生活程度が何んとなく高くなつて居る様に思われる。

勿論、私共の子供の時分に比較すると、家も、建て変わったのが、大分ある様ではあるが、それにしても、其処へ入る私の胸に昔の記憶を喚び起す丈の雰囲気は残っている様な気はする。

けれ共、今いう通り何処どこも彼処かしこも変つて了つた事は確である。あれが本郷通の五丁目だと覚えていたが、大学の赤門前を一寸入つた処に、俚俗りぞくつけぎ附木店だなというのがある。それは昔組屋敷であつたというのだが、久米正雄君の家

は今其処にある。久米君の家は昔からの家である。久米君の叔父さんに助三郎という人があつて、私と竹馬の友なので時々会う事はあるんだが、今年の春であつたか、助三郎君は正雄君の家へ訪ねて行つた事がある。が、あの辺へんも昔は何どの家も大抵は垣で囲まれて居て、玄関と門との間に、空地があつたのであるが、今は何の家うちも、殆ど直ぐ家いえの入口いりぐちになつて居る。助三郎君と、「如何も此の道が我々の子供の時分から見ると、大分狭くなつた様に思われるのだが、實際は外ほかの町が広くなつたので、其処を殊に狭い様に覚えるのであろう」と言つて笑つた事

がある。

四

私は勿論江戸っ子ではない。生れは地方であって、東京へ出て来たのは十歳の時である。だから江戸とか東京の旧い事などは直接余り知らない。けれども伝聞した事は可成かなりあるので、時偶ときたまには、そんな事を書きもする。それが為でもあるだろうが、時々江戸趣味とはどんなものかと若い人々から聞かれる事がある。

私は、所謂江戸趣味などは、次第に亡び行くであろうと答えるより他は無い。前に言った通り、昔は、狭い町で、人通りもあまりなく、如何にも、ゆったりした気分で住み得られたのであるが、今は、そんな処でも、電車の音の聞えない処は滅多にない。外へ出ればゆっくり歩いては居られないのだから、人と押し合いをして、電車に乗らなければならぬ。そうすると、どうしても、人々の気分が変って来ると思う。それから、家うちで使う種いろいろ々な器物の工合でも、非常に變って来て居る。最も著しいのは、瀬戸物の模様である。純日本式の模様の瀬戸物を買

うには、よほど選択しなければならぬ程である。

してみると、江戸趣味で行こうというには、その人が、毎日外に勤に出る必要もなく、又買物でも値に構わず、気に入ったものを買うという事の出来る位地に居なければならぬので、一言いちごんにしてこれを言えば、江戸趣味はひどく贅沢なものになって行くのである。そうすると、何うしても一般人はやろうと思ってもやれない事になるのだから、勢い、そういう趣味は人の心から段々無くなって行くものと言わなければならぬ。

言葉なども随分變つて来て居ると思う。昔の様にひど

く遠廻しな言い方などは、今の人にはまだるっこい事になろうと思う。敬語の数なども昔より段々少くなつて行く事であろう。我々の生活が我々の心理状態に種々の変化を及ぼし、これが為に又言葉にも変化を及ぼし、又変化を受けた言葉は却つて我々の少くとも気分を変えてゆくと、という風で、そういう変化は相作用して、段々我々の思想までも變つて行く事となるであろう。凡てのもの、凡ての事に互つて、それが変化してゆく事はどうも止むを得ない。只我々はよき方へ変化して行く事を望むだけである。一時は悪い方へ進む様に見えても、結局に於て

よき事に達するのであったろう、その途中の不便不快は
忍ばねばならぬ。

日本文学電子図書館

変りゆく東京

著 者：馬場孤蝶

制作者：宮澤一郎

底 本：「明治の東京」

中央公論社

昭和17年5月15日 印刷

昭和17年5月20日 発行



日本文学電子図書館